

幼稚園児の発達段階を考慮した安全教育の実践方法 Practical methods for safe education based on growth stages of kindergarten children

飯野由香利*、田畑知美**、山川和子***、西山寛子***

Yukari IINO, Tomomi TABATA, Kazuko YAMAKAWA and Hiroko NISHIYAMA

1. はじめに

2017年3月に幼稚園教育要領¹⁾が改訂され、「第1章 総則」「第3 教育課程の役割と編成等」「4 教育課程の編成上の留意事項」において、「(3)安全上の配慮で、「(3)幼稚園生活が幼児にとって安全なものとなるよう、教職員による協力体制の下、幼児の主體的な活動を大切にしつつ、園庭や園舎などの環境の配慮や指導の工夫を行うこと。」と明記されている。

そこで、筆者らは園舎などの環境の配慮や指導の工夫を行うことに着眼して研究を行うこととした。2021年にA幼稚園において、傷害に至らない「ヒヤリとした」や「ハッとした」などの出来事をいうヒヤリハットに関するアンケート調査を行い、園児の心身の発達や未熟さにより発生するヒヤリハットの内容や経緯の相違を年齢別に明らかにし、教諭のヒヤリハットの発生要因に関する認識の実態²⁾を把握した。その結果、年少児は一人遊びを好み、自由に様々な活動を始めるために1人で歩いていた時に主に保育室で転倒することが最も多く、登園直後の時間帯における発生が多かった。年中児は、保育室で友達と物で遊んでいた時が多く、時には廊下でぶつかるなどの午前中の自由遊び時間の後半の時間帯における発生が多かった。年長児は、保育室だけではなく遊戯室や園庭などへと行動範囲が広くなり、走り回る園児が増えることによりぶつかることが多くなり、友達と遊ぶ中で徐々にヒートアップする傾向があり、時間が経つにつれて発生数も増加することから自由遊びの後半の時間帯の発生が多いことを明らかにした。一方、教諭が考えるヒヤリハット発生数が最も多い要因として、いずれの組も「子どもの危険性への意識の甘さ」が挙げられた。その他の発生要因としては、年少児は決まりや遊びのルールを理解できないことや自己主張が強いために発生予測が難しく見守りが不十分になってしまうことが挙げられた。年中児は友達と関わり始め各自が自由に動くために見守りの範囲を超えることや友達と関わる中で遊びに夢中になり不注意が生じることが要因として挙げられた。年長児は友達との遊びに熱中になることで不注意が生じ、走り回るために園児自身が壁や友達にぶつかるなど教諭が対応しきれない状況にあることが分かった。

これらの調査結果を踏まえると、安全教育において、子ども自身に危険性を意識・認識させることが重要であることや園児の心身の発達段階に応じて発生しやすいヒヤリハット内容を取り上げる必要があることがわかった。さらに、安全教育の実践を行う前に、A幼稚園の教諭を対象に有効な安全教育方法に関するヒアリング調査を行った結果、ヒヤリハットに繋がる行動を園児が見聞しながら理解できる指人形劇の実践に賛同いただき、実践させていただくこととした。

本研究の目的は、園児の心身発達段階別にみたヒヤリハットの実態を踏まえた内容を考案して、予防策に繋がる安全教育を年少・年中・年長組別に実践し、実践内容を想起させる掲示物を設置して、これらの効果を検証することと、安全教育の実践上のポイントを提示することである。

* 新潟大学人文社会科学系

** 新潟大学教育学部

*** 新潟大学附属幼稚園

2. 研究方法

2.1 安全教育内容と指人形劇による実践の概要

2021年11月9日と15日に、新潟県N市内にあるA幼稚園でヒヤリハットの発生数を減らすことを目的として指人形劇による安全教育の実践を年少・年中・年長組別に2回実施し、2回目の教育実践後に予防策を想起させる掲示物を各保育室に設置した。

一方、園児の理解度調査を実践日中に行った。さらに、1・2回目の教育実践後の一定期間中に各組の担任と副担任の教諭と園長先生と養護教諭及び介助員を対象にアンケート調査を行った。これらの概要を表1に示す。

安全教育の詳細な実践内容とテーマ及び教育目的を組別に表2に示す。指人形劇での具体的な実践内容を説明する。指人形劇では、学生2人がピンクちゃんとシロくんの園児役になりヒヤリハットの発生状況を演じた。園児にヒヤリ

表1 園児を対象に行った安全教育実践と理解度やアンケート概要

実施日	2021年11月9日(1回目)、11月15日(2回目)	
対象	年少組…〈1回目〉18人〈2回目〉14人 年中組…〈1回目〉21人〈2回目〉14人 年長組…〈1回目〉20人〈2回目〉22人	
幼稚園における安全教育実践	目的	各組のヒヤリハットの実態に合った安全教育を行い、幼稚園における幼児のヒヤリハットの発生数を減らす
	方法	指人形を使った組別の安全教育実践を行う。2人の幼児役を2人の学生が行い、安全教育をする先生役を各組の担任が行う
	内容	年少組…歩く・一時停止する(1回目)周りを見る(2回目) 年中組…ハサミの扱い方(1回目)セロハンテープ(2回目) 年長組…戦いごっこ(1回目)保育室からの飛び出し(2回目)
幼児の理解度実践後の効果測定	目的	安全教育実践における知識の理解度・定着度を測る
	方法	別室にて幼児一人ひとりに安全教育実践の内容についての質問をする
	内容	教育実践の内容の知識確認2問、理解度の3段階評価1問
後安全教育実践の設置	実施日	2021年11月16日～19日
	目的	安全教育実践に関する掲示物を設置し、幼児が教育内容を想起しやすくする
	方法	各組に掲示物を設置し、設置日に担任が幼児に対して掲示物についての説明をする
安全教育実践後におけるアンケート	実施日	2021年11月12日～14日、11月19日～21日
	対象	園長 年少組 担任1人 副担任1人 年中組 担任1人 副担任1人 年長組 担任1人 副担任1人 養護教諭1人 介助員1人 回収率 100%
	目的	安全教育実施中の幼児の様子や実施後の幼児の行動の変化などについて把握する
	方法	アンケート配布後回収
	内容	教育実践中の子どもの様子、教育実践後の子どもの行動と発言の変化、教育実践の効果、安全教育のあり方についてなど

表2 安全教育の実践内容の概要

	年少組	年中組	年長組
テーマ	飛び出しは危険	ハサミやセロハンテープを上手に使う	お友達の気持ちを考えよう
教育目的	保育室の出入り口で止まり周りを見ることを習慣づける。	ハサミやセロハンテープを正しく安全に使えるようになる。	お友達の気持ちを考えて安全に遊ぶことができるようになる。
1回目の内容	年少組のピンクちゃんが保育室を飛び出して、廊下を歩いていたお友達のシロくんにぶつかる。そこにネコちゃん先生が現れて、出入り口のところで止まると安全であることを教えてくれる。	年中組のピンクちゃんがハサミを床に置いたままにしたことで、お友達のシロくんがハサミを踏んで痛がる。そこにチョキチョキ先生が現れて、ハサミの正しい片付け方を教えてくれる。	年長組のピンクちゃんとシロくんが戦いごっこをしていて、ピンクちゃんが痛がっているがシロくんはやめなかった。そこにワンちゃん先生が現れて、ピンクちゃんはどんな気持ちになったかを一緒に考える。
2回目の内容	年少組のピンクちゃんが保育室の出入り口で止まったが、廊下を歩いていたお友達のシロくんにぶつかる。そこにネコちゃん先生が現れて、周りを見てから保育室を出ると安全であることを教えてくれる。	年中組のピンクちゃんがセロハンテープの刃を触って怪我をしてしまう。またセロハンテープを床に置いたままにしたことで、お友達のシロくんがセロハンテープにつまづいてしまう。そこにチョキチョキ先生が現れて、セロハンテープの正しい使い方と片付け方を教えてくれる。	年長組のピンクちゃんが保育室から遊戯室に飛び出して、遊戯室で遊んでいたシロくんにぶつかる。ピンクちゃんが怒って喧嘩になる。そこにワンちゃん先生が現れて、シロくんはどんな気持ちになったか、ピンクちゃんは何が悪かったのかを一緒に考える。

ハットの要因に気づかせて予防策を教示する先生役を担任の教諭に演じていただいた。背景に幼稚園内の写真を貼り、教示内容に合わせて道具を準備した。

年少組は、周りが十分に見えないなどの未発達が原因で友達との衝突が多いことや、飛び出しは危険であることを教諭が伝えてはいるが危険の意味が良く分からず教示内容が身につかない園児がいることを踏まえて、「飛び出しは危険」を教育テーマにした。指人形劇では、園児同士が保育室の出入り口でぶつかる場面を1・2回とも行った。1回目の実践では保育室を出る時には歩いて出入り口に行き一時停止をすることを教え、2回目の実践では出入り口で一旦止まって周りを確認してから廊下に出ることを教えた。

年中組は、事前訪問時にハサミやセロハンテープが下に置いてあることについて教諭が子どもに何度か注意をしている姿が見られ、ハサミの片付けができていない年中児がいることが分かったことから、「ハサミやセロハンテープを上手に使う」を教育テーマにした。園児がけがをしないように1回目の実践時にはハサミを床に置かないことを、2回目の実践時にはセロハンテープを床に置かないことを教示した。

年長組は、2020年に行った幼稚園の事故の発生に関するアンケート結果で、ごっこ遊びによる怪我が多いことが分かったことから、「友達の気持ちを考えよう」を教育テーマにした。1回目の実践時には戦いごっこをしていて相手の子が痛いと訴えているにもかかわらず戦いを止めない場面を、2回目の実践時にはごっこ遊びにおいて勢いよく保育室から飛び出して友達とぶつかる場面を演じて、友達の痛みや気持ちを考えて自己の行動を抑えることを教示した。

2.2 園児の安全教育内容の理解度調査の概要

実践日中に、組別に各園児の理解度や知識の定着度を確かめるために理解度調査を行った。園児を対象とした理解度調査の回答形式を表3に、園児に質問した内容を組別に表4に示す。1・2問目でヒヤリハットを防ぐ正しい方法を二者択一で選んでもらい、3問目で「よくわかった・少しわかった・わからなかった」の3段階で園児自身に理解度を評価してもらった。

表3 理解度調査における回答形式

1・2問目	2択で正しい回答を選んでもらう
3問目	理解度の自己評価（3段階）

表4 理解度調査で子どもに質問した内容

	1回目	2回目
年少組	質問1：部屋を出るときは走るか歩くか。 質問2：部屋を出るときはピタッと止まるか通り過ぎるか。 質問3：部屋を飛び出すと危ないことが分かったかどうか。	質問1：部屋を出るときはドアのところではピタッと止まるか通り過ぎるか。 質問2：部屋を出るときは前だけを見て出るか周りをキョロキョロ見て出るか。 質問3：キョロキョロ周りを見るのが大事だということが分かったかどうか。
年中組	質問1：ハサミを使い終わったら、床に置くかハサミのお家に戻すか。 質問2：ハサミを使い終わったら、そのまましておくかキャップをつけるか。 質問3：ハサミを使うときに気を付けることが分かったかどうか。	質問1：セロハンテープを使うときはギザギザのところを触っていいか。 質問2：セロハンテープを使い終わったら、床に置くか机の上に置くか。 質問3：セロハンテープを使うときに気を付けることが分かったかどうか。
年長組	質問1：「痛い」と言ったときに、シロくんがやめてくれなかったときのピンクちゃんの気持ちは嬉しかったか悲しかったか。 質問2：2人とも楽しく遊べたとき、2人の気持ちは嬉しかったか悲しかったか。 質問3：お友達の気持ちを考えることが大切だということが分かったかどうか。	質問1：ピンクちゃんとシロくんがぶつかってピンクちゃんが「痛い」と言ったとき、シロくんは痛かったと思うか。 質問2：部屋から遊戯室に出るときは、周りを見ながら出るか走って出るか。 質問3：お友達の気持ちを考えて遊ぶことの大切さが分かったかどうか。

2.3 安全教育における教示内容の想起のための掲示物の概要

2回目の教育実践後の2021年11月16～19日に教育実践内容を想起してもらえるように掲示物を各組に設置した。組別の掲示物の内容、設置場所、意味は以下のとおりである。

a.年少組

1回目の安全教育に関する掲示物

- ・ 掲示物の内容と設置場所：年少組保育室出入り口に、年少児の目線の高さに、周りを見ている様子のうさぎの顔が描かれている絵を設置。(写真1扉)
- ・ 掲示の意味：「お部屋を出るときは周りを見ること」を示す。



写真1 年少組の掲示物

2回目の安全教育に関する掲示物

- ・ 掲示物の内容と設置場所：年少組保育室の出入口の床（出入口2か所に1つずつ）に足跡を設置。(写真1床)
- ・ 掲示の意味：「お部屋を出るときは、ピタッと止まること」を示す。

b.年中組

1回目の安全教育に関する掲示物

- ・ 掲示物の内容と設置場所：年中組の工作スペースの机の上にハサミのお約束を設置。(写真2左の用紙)
- ・ 掲示の意味：ハサミを使う時は床に置いてはいけないこと、ハサミを開いたままにしてはいけないこと、ハサミはキャップをつけてはさみのお家に戻すことを示す。



写真2 年中組の掲示物

2回目の安全教育に関する掲示物

- ・ 掲示物の内容と設置場所：年中組の工作スペースの机の上にセロハンテープのお約束を設置。(写真2右の用紙)
- ・ 掲示の意味：セロハンテープのギザギザは触らないこと、床に置かないことを示す。

c.年長組

1回目の安全教育に関する掲示物

- ・ 掲示物の内容と設置場所：年長組保育室内に、友達とのごっこ遊びにおいて、お友達の痛みや気持ちを考えることについての掲示。(写真3扉)
- ・ 掲示の意味：戦いごっこの時に、友達を強く叩きすぎてはいけないことを示す。

2回目の安全教育に関する掲示物

- ・ 掲示物の内容と設置場所：年長組保育室から遊戯室に繋がる出入口周辺に、周りを見ることや歩くことの呼びかけを設置。(写真3上部)
- ・ 掲示の意味：遊戯室に出る時は歩いて周りを見ながら出るとを示す。



写真3 年長組の掲示物

2.4 教諭を対象にしたアンケート調査の概要

表1に示すように、教育実践後の2021年11月12～14日と11月19～21日に、指人形を使用した安全教育の実践中の園児の様子や実践後の園児の行動や発言の変化、及び教育実践方法などに関するアンケート調査を行い、教諭が回答した。

3. 結果と考察

3.1 安全教育実践時の様子と教育内容の理解度

教育実践時の子どもの様子を表5に示し、各組の教育実践時の子どもの様子を写真4・5・6に示す。コロナ禍でもあるために各園児間の距離をある程度確保するために広範囲に座ってもらった。どの組でも問いかけに対して多くの園児が声を上げていたが、それ以外の時間では静かに良く聞いていた。年少組では1回目、2回目ともに「テクテク」「ピタッ」という、教育実践中に出てくる言葉を発言していた。擬音語を使って教育することで年少児に印象を強く残すことができていることが分かった。また年中組では、指人形劇において担任教諭が参加することを知って、驚きと喜びの声があがっていたことから、担任教諭が実践に参加することで、園児の興味・関心がさらに高まることが分かった。1回目の実践で「キャップをつける」「ハサミは赤い箱に戻す」という発言があった。2回目の実践で「ギザギザを触ると危ない」という発言があり、対話をする中で正しい知識に繋がる発言が多く出ていた。さらに、年長組の1回目の実践内容は、実践前に担任教諭から年長児全員に指導していたものだった。指人形劇で事前に指導があった内容を再確認できたことにより、園児の反応がより大きくなり強く印象づいている様相が伺えた。2回目の指人形劇中で先生役と園児との間に対話を取り入れたところ、多くの園児が問いかけに対して答えていた。

表5 教育実践時の子どもの様子

	1回目	2回目
年少組	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜぶつかったのかを問いかけたときに、「よく見ていないから」という発言があった。 ・「テクテク」「ピタッ」という発言があった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の冒頭で、1回目の学習を思い出して「テクテク」「ピタッ」という発言があった。 ・周りを見ることを表す人形の動きが理解しづらそうので、問いかけに反応がなかった。
年中組	<ul style="list-style-type: none"> ・「キャップをつける」という発言があった。 ・「ハサミは赤い箱に戻す」という発言があった。 ・担任が参加したことで楽しそうにしていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ギザギザを触ると危ない」という発言があった。
年長組	<ul style="list-style-type: none"> ・”友達の気持ちを考えることの大切さ”を理解している発言があった。 ・友達を強く叩いたことのある子の反応が大きかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「遊戯室の角が危ない」という声が上がった。 ・問いかけに何人もの子が大きな声でしっかり答えていた。
全組	<ul style="list-style-type: none"> ・問いかけをしない限り、静かに良く聞いていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・問いかけをしない限り、静かに良く聞いていた。



写真4 年少組実践時の様子
(年少児保育室)



写真5 年中組実践時の様子
(遊戯室)



写真6 年長組実践時の様子
(遊戯室)

安全教育で教示した内容を二者択一で園児が正答した割合（正答率）と園児自身が訴えた3段階の理解度を図1に示す。年少組の正答率は1回目の実践後で2問とも80%を超えているが、2回目の実践後には2問目が79%となり1回目と比べて下がった。この理由として、2回目の実践において、「周りを見なかったことによって衝突すること」を指人形劇で再現しようとしたが、指人形の両園児役の位置関係において互いに死角になっておらず見えていたにもかかわらず衝突

した現象を見て理解できなかったことを教諭の一人から指摘された。

年中組の正答率は1回目の1問目で95%と100%で、2回目の1・2問とも100%になった。年長組の正答率は1回目の2問で85%と95%であったが、2回目は95%と100%で高くなったことから、2回の実践により正しい知識がより定着することが分かった。年中・年長組において、正答率が高くなった理由の1つとして、2回目の実践時に対話を取り入れたことが挙げられる。

年少・年中・年長組別に教育実践内容の理解度をみると、年少児の理解度は、「よく分かった」の割合は1回目で74%となり2回目で79%と5%増え、「分からなかった」の割合は1回目16%で2回目7%となり9%減った。理解の深まりを感じていた年少児が多くなったことが分かった。また、年中児の理解度をみると、「よく分かった」の割合は1回目90%で2回目で93%となり増加した。ハサミやセロハンテープの扱いについては、身近で日頃から指導されており知識としてあった内容を再確認できたと考えられる。さらに年長児の理解度をみると、「分からなかった」の割合は1回目5%だったが2回目は0%になり、「よく分かった」が1%微増し、「少し分かった」が4%増えた。実践を2回行うことで友達の気持ちの考え方が定着したことや、2回目の実践で遊戯室内に急に飛び出すと危ないという知識は年長児にとって理解しやすかったことが考えられる。

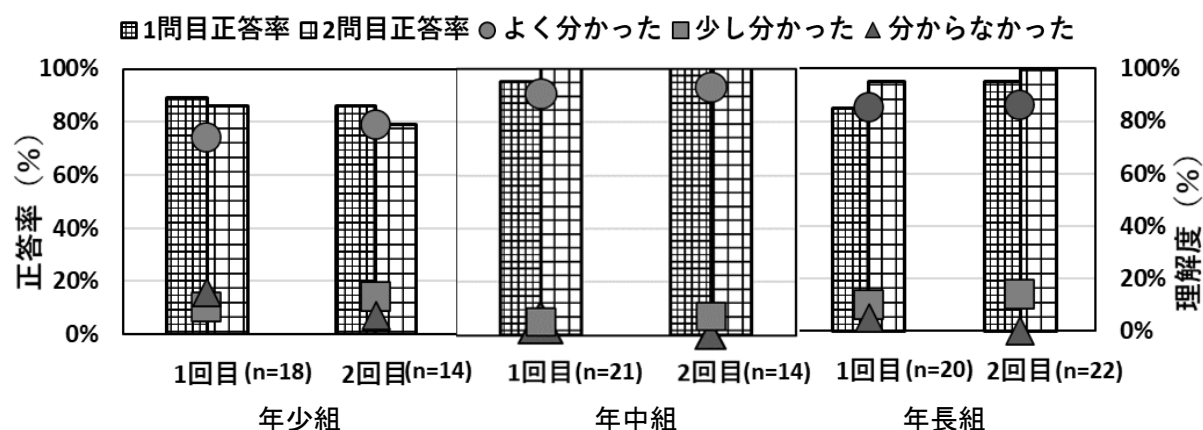


図1 組別にみた1・2回目の教育内容の2つの質問に対する園児の正答率と理解度

3.2 安全教育実践や掲示物の設置に関する幼稚園教諭の評価

1・2回目の安全教育実践や掲示物の設置に関する教諭の感想・改善点を表6に示す。1回目の教育実践を終えて、良かった点として、指人形劇は子ども達の興味を引いたことや子どもが直面している問題をテーマに取り上げたこと、及び年少組で「テクテク」「ピタッ」という擬音語を使ったことで年少児の理解の助けになっていたという意見があった。このことから、発達段階に合った言葉を使うことが理解の助けになることが分かった。改善点としては、対話をして子供の気づきを取り上げることの必要性、及び1回だけの教育実践に留まるのではなく、実践後の指導や働きかけの仕組み、及び掲示物などによる教示内容の想起などの継続的な教育の必要性が挙げられた。

2回目の教育実践後の意見として、1回目の実践で対話が少なく一方的だったという意見が多くあったために2回目の実践では多くの対話を取り入れたことにより、子どもが集中していたこ

とが指摘された。子ども自身が考え、子どもに気づかせ、他の園児の意見を聞き取りながら教育を進めることの重要性が示唆された。また、1回目の実践後に指摘された継続的に働き掛ける仕組みが必要だという多くの意見を踏まえて、2回目の実践の翌日から4日間に渡って教育実践の掲示物を設置した。「掲示物によって教育内容が意識されていった」や「教育実践についての発言をしていた」という意見があり、教育実践を単発的に行うのではなく、実践後における継続的な働き掛けなどの仕組みの必要性が明らかになった。また1回目・2回目の意見で「人形劇は年少組の子ども達の興味をひいていた」という意見や「可愛いらしい指人形の力で年少組が非常に興味を持っていた」という意見もあり、いつもは行っていない人形を使って教育することで、年少児は興味を特に持つということが分かった。改善点として、年長組の1・2回目の教育実践内容から共通テーマのお友達の気持ちを考えようという内容を把握することが難しかったことや子どもの視線を十分に考慮した状況設定（死角など）になっていなかったこと、及び子どもに再度考えさせる場面を設定することなどが挙げられた。2回目の実践後においても、繰り返し継続的な指導の必要性や子どもの主体的な安全意識の育成の重要性が示唆された。

表6 幼稚園教諭の安全教育実践時の感想と改善点

1 回目 の 安 全 教 育 実 践 後 の 意 見	<ul style="list-style-type: none"> ○指人形劇は子ども達の興味を引いていた。 ○子どもが直面していた問題がテーマだったので、理解しやすかったと思う。 ○「テクテク」「ピタッ」が年少児が理解しやすい言葉で理解の助けになっていた。 △★対話をして子どもの気づきを取り上げた方が良い。 △★事後指導や継続的に働きかける仕組みが必要。 △★掲示物の掲示して継続的に働きかける。 △実践を1回行っただけでは実践に結びつけることが難しい。 △子どもが既に理解している内容だった。 △指人形が小さかった。
2 回 目 の 安 全 教 育 実 践 後 の 意 見	<ul style="list-style-type: none"> ○前回より発声がよく聞きやすかった。 ○対話があったので子どもは集中していた。 ○掲示物が継続的な指導を意識したものになっていた。 ○掲示物によって教育内容が意識されていた。(個人差有り) ○子ども達が教育実践後に教育実践についての発言をしていて、記憶に残る実践になっていた。 ○楽しみながらの教育で、子どもの心に届きやすかったと思う。 ○口頭だけの指導よりも可愛いらしい指人形の力で年少児が非常に興味をもっていた。 △年長組のテーマが絞られていなかったため、子どもは分かりにくかったかもしれない。 △背景写真が情報量が多く、年少児には理解できていなかった。 △死角から友達が走ってくるという状況設定では、指人形が子どもから見えていたため理解するのが難しかった。 △あらかじめ子どもとの対話を通して課題を決めて、その後どのように変化があったのかを自身で調査するべきだった。 △教諭が指導し続けなくても行動化できる仕組みがあると良かった。 △子どもに考えさせるときに、もう一度その場を再現し考えさせると良かった。 △心情に訴えかけるような指導が子どもの主体的な安全意識を育てると思う。 △掲示を貼るだけで終わりではなく、繰り返し注意を促したり、できた時は褒めたりしていくことが大事。

3.3 安全教育実践による教育的効果

指人形劇による安全教育実践と掲示物の教育効果を図2に、教育効果の理由を教育実践と掲示物別に図3に示す。効果が「とてもあった+ややあった」の評価の合計割合は教育実践で70%以上で、「ややあった」の割合が高い。理由として、「適当な時間の長さだった」(9件中1回目4件、2回目6件)と「目と耳の両方で理解できた」(1回目4件、2回目5件)、及び「子どもが興味を引く内容だった」(1回目2件、2回目5件)が挙げられ、2回目の実践後に挙げられた理由の件数は増加した。指人形劇の時間を教諭の意見を参考にして10分前後にしたこと、指などの細かい動きに着目しながら指人形劇を見ており園児役の発言や先生役の指導内容に傾聴できていたこと、及び園児にとって日常的に経験や見聞したことのあるヒヤリハットの内容であったこと、

2回目で対話を入れたことなどにより、指人形劇の状況をより深く理解できたと考える。

これらのことから、自分事として捉えることができる教育内容であること、幼児期の子どもにとって集中力を持続させることができる適当な教育実践時間であること、指人形を使うなど目や耳などを活用する仕掛けにより楽しむことや興味・関心を引き付けることができることなどの重要性が示された。

一方、掲示物による効果（図2）が「とてもあった+ややあった」の評価の合計割合は掲示物で100%であった。効果の理由として、「目で見て安全教育の内容を思い出していた」（5件）が最も多かったことから、視認して教育内容を思い出すことの有効性が示された。安全教育を単発的に行うのではなく、学んだことを日常で継続的に予防策を想起させ、行動の習慣化に繋げることの重要性が分かった。また、園児にとって見てすぐに理解できる掲示物の必要性も認められた。

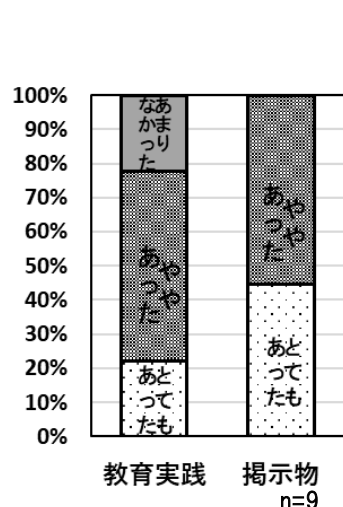


図2 教育実践と掲示物の効果（教諭の回答）

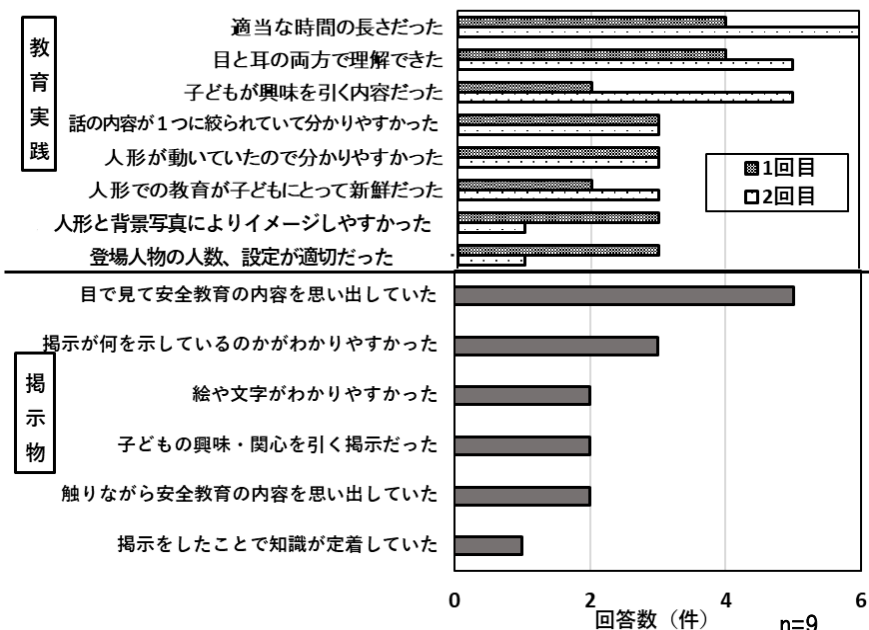


図3 安全教育実践と掲示物による教育効果の理由（教諭の回答）

3.4 安全教育実践後における園児の行動や発言の変化

教育実践後に教諭が見聞した園児の行動と発言の変化内容を表7に示す。年少組では、うさぎの絵を扉に設置した1回目の教育実践後の変化は特に見られなかったが、床に足跡を設置した2回目後には走って飛び出す行動がなくなり、掲示物の設置場所で止まる姿が見られた。視界の範囲が狭い年少児にとって、低い位置に掲示物を設置することの有効性が示されたと言える。また年中組では、1回目の実践後アンケートで「ハサミを開いたままにする子どもが増えた」という記述があった。教育実践中のハサミの片付け方の中で、ハサミを開いたまま置くことについては触れなかったことが要因と考えられる。「床にハサミを置く子どもは減った気がする」という記述があり、教育実践の効果が表れていることが分かる。2回目の実践以降には、友達に声をかける様子が見られ、ハサミについて気をつけていたが、セロハンテープのカッターへの配慮までは身につけることができない様子も伺えた。さらに年中組では、1回目の実践後に戦いごっこが減る傾向が見られ、痛みを与えることに関して友達間で互いに注意する様子が見られた。2回目の実践後においても、危険な行動に対しての声掛けが見られた。このように、友人との関わりが増えてくる中で、友達に声をかけるという変化が見られた。

表7 教育実践後における教諭が挙げた園児の行動や発言の変化

	1回目	2回目
年少組	〈行動〉記述なし 〈発言〉記述なし	〈行動〉 ・走って出入りしなくなった。 ・掲示物のところで止まりキョロキョロしていた。 〈発言〉 ・教諭が働きかけをしていないときに「ピタッ」「キョロキョロ」と言っている声が聞こえた。 ・「テクテクピタッだよ！」と言っている子がいた。 ・ネコちゃん先生が自分たちを見ていることを話題にしていた。
年中組	〈行動〉 ・今までハサミを開いたままにしている姿は見られなかったのに、ハサミを開いたままにしていた姿があった。 ・床にハサミを置いたままの姿はなんとなく減った気がする。 〈発言〉 ・ハサミの片付けやキャップ等出来ていないお友達に声をかける姿が見られた。 ・出しっぱなしはダメだよ～等と言いながらも、片付けてあげていた。	〈行動〉 ・ハサミは気をつけようとしていた。 ・セロハンテープカッターはなかなか身につかない様子が見られた。 〈発言〉 ・友達に声をかける様子が見られた子が見られた。
年長組	〈行動〉 ・戦いごっこなどをあまりしなくなった。 〈発言〉 ・「叩いたらいけないだよ」「痛いことしちゃダメだよ」「キックしないんだよ」と声をかける子がいた。 ・危ないときに「それやめた方がいいんじゃない?」「ストップ!」などと声をかける子がいた。	〈行動〉 ・記述なし 〈発言〉 ・教師が子どもに話を聞くと、角が見えないから危ないなどのことを言っていた。 ・歩くんだよ!走らないよと友達同士で声を掛け合う姿がみられた。

3.5 安全教育の実践方法の検討とポイントの提示

園児への安全教育方法として、教諭が実演する安全教育と指人形を使った安全教育の各々の特徴として挙げられた結果を図4に示す。「実演の方が、言葉や動きでヒヤリハットを再現しやすい」(9件中7件)、「実演の場合、ヒヤリハットが起こった後にすぐに指導できる」(4件)、「実演の方が手間がかからずに教えられる」(2件)、「実演の方が子どもにとってわかりやすい」(2件)が挙げられた。これらのことから、教諭が実演する安全教育では、準備する手間がさほどなく、即行的に如実にヒヤリハット状況を再現できることから、ヒヤリハット発生後の早いうちに、ヒヤリハットの状況についての危険性や発生原因及び予防方法を園児と対話しながら園児自身に考えさせることのできる有効な方法と言える。この方法は実演内容を集中して見聞して理解でき、ヒヤリハットの発生要因などを考えることができる年中児や年長児に適していると考えられる。

一方、指人形を使用した安全教育では、「指人形の方が子どもの興味・関心を引きつけやすい」(7件)、「指人形を保育室に置いておくと、安全教育のポイントを思い出せる」(2件)、「指人形を一度製作すればいろいろな状況で使用できる」(1件)、「子ども自身で指人形を使って安全教育ができる」(1件)が挙げられた。指人形劇による教育では、指人形や設定背景や場面設定などの様々な準備が必要であるが、園児の興味・関心を引いて予防策を教育することができること、掲示物や使用した指人形により教育内容を思い出して予防策を意識することに繋がること、指人形を使用しながら継続的な指導や遊びができることにより繰り返し安全教育ができることが分かった。ヒヤリハットの発生状況の把握や言葉による教育が難しく、繰り返し教える必要のある年長児にとって有効な教育方法であると考えられる。

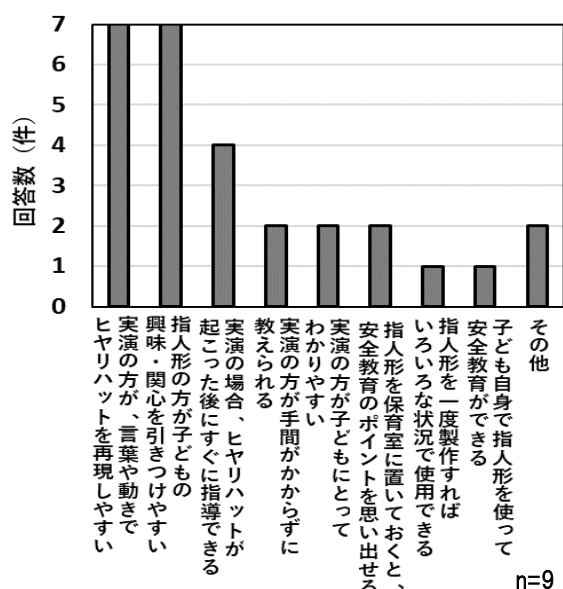


図4 指人形を使った教育と教諭の実演の相違（教諭の回答）

さらに、園児の理解を促すための安全教育の方法や実践効果を高めるポイントなどを表8に示す。安全教育の内容は、園児の心身の成長段階において起こりやすいヒヤリハットの発生要因や場面などを考慮して、園児が日常生活の中で身近に見聞や経験したことのあるヒヤリハットの内容を取り上げることや1・2個の予防策に絞って教示することが重要である。安全教育の実践方法としては、園児の興味・関心を引き、聞きながら視覚的に内容を確認しながら理解できるようにして、実践時間は園児の集中力が続く10分前後で行い、予防策を継続的に繰り返し意識させる仕組み（掲示物の設置など）が必要である。特に、ヒヤリハット発生の状況把握が難しく言語の伝達が十分でない年少児の場合、感覚的に把握できる擬音語を用いることや指人形でヒヤリハットの発生状況を再現しながら園児の理解に繋げ、掲示物などを活用しながら継続的に繰り返し予防策を意識させることが有効である。

安全教育において、ヒヤリハット発生後の早いうちに、発生状況を担任の教諭が実演して、危険性や発生要因及び予防方法を年中児や年長児自身に考え気づかせる方法は即行的で有効な方法である。一方で、危険な状況の予知が難しい年少児の場合には、子どもたちの興味・関心を引く指人形や擬音語などを活用して理解できるような仕掛けが必要で、予防策を繰り返し想起させる掲示物などを用いて継続的に教育する方法も有効である。

表8 安全教育の実践上のポイント

子どもの理解を促すポイント	教育実践の効果を高めるポイント	その他のポイント
<ul style="list-style-type: none"> ・身近な内容である。 ・内容が絞られている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・10分前後の教育時間が適当である。 ・目と耳の両方で理解できる内容にする。 ・興味・関心を引く内容である。 ・園児と対話をしながら話の内容を進める。 ・年少児には擬音語を使うことが理解の助けになる。 ・継続的に働きかける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教諭の実演によるヒヤリハットの発生状況を再現した安全教育も他の園児への周知に大変有効である。 ・指人形は園児の興味・関心を引きつけやすく、ヒヤリハットの発生状況を理解しやすい。 ・予防策としての掲示物は、安全教育の内容を想起させることから、継続的な安全教育に有効である。

4. まとめ

A 幼稚園において発生数が多いヒヤリハットの予防策を教える安全教育を指人形を用いて年少・年中・年長組別に実践し、実践後に実践内容を想起させる掲示物を設置した。園児の理解度調査や安全教育実践の内容や方法、掲示物の設置、及び教育実践後の園児の行動や発言の変化に関して幼稚園教諭を対象にアンケート調査を行い分析した。得られた知見を以下に示す。

- 1) 指人形劇による安全教育の実践時において、いずれの組の園児も静かに良く聞いていた様相が伺えた。年少児の場合、擬音語を用いて教えることにより、感覚的にヒヤリハットの発生経緯や予防策を理解できていたが、年中児と年長児に比べると正答率や理解度が多少低い傾向があった。年中児と年長児の場合には、安全教育の実践を2回行うことで正答率や理解度が2回目の方が高くなった。増加の要因の1つとして、2回目の実践時には人形劇中の先生役と園児との間で対話を取り入れたことにより様々な発言があり、園児の理解度が深まったことが挙げられた。
- 2) 指人形劇による安全教育実践と実践後の掲示物の設置を通しての幼稚園教諭の意見を分析した結果、年少児の場合、指人形劇は園児の興味を引いており、擬音語の活用により園児の理解を助け、掲示物の設置により継続的な安全教育に繋がっていたこと、及び年中児と年長児への2回目の安全教育時に対話を取り入れたことにより園児が集中して参加できていたことが挙げられた。
- 3) 安全教育の効果について分析した結果、指人形劇の効果は「ややあった」の割合が最も高く、ある程度の効果は認められた。効果があった理由として、園児が集中できる10分前後の実践時間であったこと、及び園児が興味を持ち目と耳の両方で理解できていたことが挙げられた。また、掲示物の設置の教育効果は、「とても+ややあった」の合計割合が100%であった。効果があった理由として、教育内容を目で確認して継続的に思い出す助けになっていたことが挙げられた。さらに、教育実践との行動や発言の変化として、年少児は低い位置に設置された掲示物を見て教示内容を思い出している行動や発言があった。年中児や年長児はヒヤリハットの発生に対して自身で気をつけたことにより発生件数が減る傾向があり、さらに友達との間で声をかけあって注意している様子が伺えた。
- 4) ヒヤリハットの発生後に、教諭が即行的に如実にヒヤリハットの発生状況を再現して実演する安全教育では、準備する手間がさほど必要なく、ヒヤリハット発生後の早いうちに、ヒヤリハットの危険性や発生原因及び予防方法について園児と対話しながら園児自身に考えさせることができる有効な方法であることが分かり、年中児や年長児に適していると考えられる。一方、ヒヤリハットの発生状況の把握や言葉による教育が難しい年長児への指人形を用いた安全教育実践や掲示物の設置は、園児の興味を引くことができ、教示内容を絞り、擬音語を用いることで感覚的な理解を助け、劇で使用した指人形や絵の活用や遊びを通して日常的に継続して教示内容や予防策を意識させるには有効な方法である。
- 5) 安全教育の実践上のポイントとして、子どもの理解を促すポイント、教育実践の効果を高めるポイント、及びその他のポイントに分けて提示した。

謝辞

本調査において、多大なるご理解とご協力をいただきました A 幼稚園の担任・副担任の教諭や園児の皆さまに、深謝の意を表します。

本研究は、文部科学省科学研究費助成事業（基盤研究（C） 課題番号：19K02316 代表者 飯野由香利）の研究助成を受けました。

参考文献

1) 幼稚園教育要領解説、文部科学省、平成 30 年 2 月

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/04/25/1384661_3_3.pdf

2) 飯野由香利、田畑知美：年齢別にみた幼稚園児の心身の特徴とヒヤリハット発生件数との関係、新潟大学教育学部研究紀要、第 13 巻第 2 号、pp.259～266、令和 3 年 2 月